



特集 〈入園〉

幼稚園入園の頃

— 緩やかな母子分離と子どもの時間を保障したい —

向山 陽子

入園前の子どもとお母さんたち

三十数年前、大学卒業後に勤めた幼稚園では、入園直後に保護者面談がありました。担任として、入園までの家庭でのお子さんの様子などを保護者の方から伺うのが目的の面談でした。あるお母さんから「私はあの娘がかわいいと思えませ

ん。抱けないのです。私が望んだ娘ではないのです。妹は望んだ子ですのでかわいいと思えます。どうすればよいでしょう」と相談されました。当時の私は、何を話したのでしょうか。その子の顔が頭の中でぐるぐる回っていたことと、目を伏せたお母さんの辛そうな顔が想い出されます。入園までの四年余、このお母さんは、ご主人が帰るま

で、かわいいと思えない長女とかわいい次女との三人でどのように時間を過ごしてきたのだろう。またこの子は、母親との関係をどのように築き、依存すべき世界への信頼感をどのように育ててきたのだろうか、ずっと気がかりでした。

二十数年前、子育て中心の生活を選んで、十一年間勤めた大好きな幼稚園教諭の仕事を辞めた翌朝、時計を見ないで娘とずっと過ごせる幸せとともに感じたのは、社会からの孤立感と焦りでした。あふれんばかりの幸せと表裏一体にあるこの孤立感と焦りからの自立は、人の親として育つための試練のようにも思えました。

娘が幼稚園に入園するまで、私の子育ての支えになったのは、七、八組の地域の子育て仲間でした。近くの公園で朝から夕方まで遊び、適度な距離を保ちながら、愚痴を言い合い、時にはママチャリを連ねて遠出もしました。その子育て仲間

も、子どもたちが四歳を過ぎる頃、幼稚園、保育園への入園、引越しとそれぞれの未来と子どもたちに沿って自然に関係が変わっていきました。

急いでいるお母さんたち

オランダから帰国し、幼稚園の園長職に就いて十年が経ちます。子どもたちの幼児期後半の豊かな育ちを保障することは勿論のこと、お母さんたちの子育てを応援したいと努めてきました。

子育て最中にあるお母さんたちの悩みは、三年前も今も変わっていないのかもしれませんが、お母さんたちを取り巻く社会は、夕暮れ時、家路を急ぎ、ゆ〜やけこやけ♪と子どもと唄いながら夕焼け空を眺めた、あの豊かな時間を見失っているように思われます。夕空は今日も茜色に照り映えているのに、ママチャリは子どもと追われるように走っていきます。



社会は、少子化・情報化・都市化へと変化し、“子どもの素の姿”や“子どもの時間”をよしとする、ゆったりとした価値観や眼差しがどんどん失われているように思えます。

子どもが少なくなるということはこういうことなのだ、ひしひしと感じます。

先日、こんな話を聞きました。

「最近、生命が宿ったと判ると、かわいいう赤ちゃんが生まれてきたら、こんな洋服を着せ、どこそこ遊びに行つて、お稽古は何と何を習わせよう」と思い描き、出産するとすぐにそのお稽古先に電話して予約を取るのだとか……幼稚園・小学校選びもその延長線上にあるらしい。今のお母さんたちはとても急いでいます」

そんな先まで決めてしまつて大丈夫？ 自分で敷いた線路に縛られないでね。道は目の前にいく

つもあつて子どもは自分で選んでいくよ。ゆつたりと我が子との今を楽しめば、人生を二倍生きられるよ。もつたないなあと思いをめぐらした。

最近、我が子への寛容さと周囲に対しての心配りがもう少し豊かになると、お母さん同士の人間関係も滑らかになるのと思える場面がよくあります。たとえば、公共の場で大声を出して走ろうとする我が子をなだめながら、周囲への迷惑を詫びる態度をとる母親よりも、走り回るのを放任するか、我が子に自分の困惑と怒りをぶつけ、その場からいなくなるお母さん。さぞかし、イライラが募り、子どもも辛いことでしょう。

また、子どもは親からは見えない時間と空間で、仲間の中でこそ、親の知らない姿を見せながら育つていくことを、直視できないお母さんも増

えています。我が子のことは何でも知っていたいと、根掘り葉掘り聞きだし、子どもの言葉を鵜呑みにし、保育中の友達関係や、遊ぶ内容にまで指示を出して、子どもを遠隔操作しようとするお母さんがいます。そんなお母さんたちも、幼稚園での子どもの成長に、子ども同士の教育力、子ども自身の育つ力を信じられる親に育っていきます。

幼稚園の地域での役割

こうして考えていくと、幼稚園というところは、子どもたちが素の姿で振る舞うことができ、子どもの時間が流れる場であるといえます。

また、子どもらしい生命の輝きや空想力、未来への希望、人と社会への信頼感、人は人の間で社会的人間として育つ力をもつことや、子どもの優しさ・たくましさ・しなやかさを体感できる場として、大人たちのエネルギー再生の場としても、

もつと社会に尊重されるべき場なのでしょう。さらに、子どもたちの成長を通じて、親として育ち合う場としても、重要になってきます。

母親力・父親力を育てることが、子どもたちの安定と幸せな親子関係に繋がり、子どもたちが安心・安定できる居場所のある地域再生に繋がるのなら、さらに地道な努力を続けていこうと思いません。

Y幼稚園入園の頃

「ご家庭で、存分に愛情を受け、慈しみ育てられたお子様は、その安定感を基に、二三歳頃になる





と、一日に四〜五時間なら、大好きなお母さんと離れて、同年代の仲間と遊ぶ中で育ちます。

初めての社会への入り口は緩やかに始まりたいものです。Y幼稚園は母子分離を急ぎません。

お子様の心にはっきりと『おかあさん』をもてたとき、誰もが安心して新しい社会に入っていきます。同年代の仲間の中で育つ「とき」がきたのです。

お母さま、その時はあなたも我が子のイメージを心にしつかりともって、お子様を仲間の中へ送り出してください。

そして、あなたの元へ帰ってきた「とき」には、丸ごと抱きしめて暖かい眼差しと懐で迎えてあげてください。そこに言葉はいりません。」

Y幼稚園新入園児三歳児保護者説明会（十二月）資料からの抜粋です。Y幼稚園の保育方針、保育内容、体制などの説明に加えて、かなり力を

入れて説明します。

Y幼稚園では、子どもがお母さんから離れることを嫌がったら、お母さんも一緒に幼稚園で過ごしていただきます（お仕事で園にいられないときは、全面的に幼稚園でお引き受けすることもあります）。子どもは安心できたら、自ら一步を踏み出しますから、離そうとしないてください。今は、ありのままの子どもを丸ごと受け入れて、安心して母子水入らずの最後の冬を、ぬくぬくとのんびりと抱きしめて過ごして欲しい、と続けます。『そんなことをしたら、幼稚園には行けない』『幼稚園の先生に叱ってもらおう』などと、言わないで欲しい、子どもの楽しい幼稚園の印象を壊さないで欲しいと願っています。

親離れできない子どもはやがては離れますが、難しいのは子離れできない親に思い切つて離れていただくことです、とも話しておきます。

おむつが取れないという相談も、ここまできて取れなければ取るうと焦らないうで欲しい、焦らずこの冬に取れたなら一緒に喜びましょう、と話します。

何故、『入園式』から幼稚園が始まるの？

「初めてY幼稚園に来た見学のときも、遊んでいるお兄さんお姉さんたちは楽しそうだったし、園庭開放でも、一日入園でも、たくさん遊べたのに、楽しみにしていた幼稚園が始まる最初の日、お母さんもお父さんもいつもとは違ってすごく緊張しているしお化粧してる……どうして今日は遊べないんだ？」私が新入園児だったら、こう感じるだろうなとずっと思っていました。

日本の文化なのでしょう。節目としての「式」を大切にしたい保護者の方々はたくさんいらっしやいます。そこで、入園式の数日前に、気楽に

母子で遊びに来る日「ふれあい牧場の日（移動動物園）」を設けています。ポニー・ウサギ・モルモット・ヒツジ・ヤギ・ブタ・アヒル・ヒヨコ・カメラ……新入園児はお母さんと遊びにきて楽しんで帰っていきます。素の親子関係が見られる機会です。入園式の前に、仲良くなれる日でもあります。

こうして、子どもたちのY幼稚園での生活が始まります。毎朝、玄関前で「おはようございます」と挨拶をして子どもたちをお預かりするとき、親御さんが晴れやかな顔ならば、今日の一日は上々の始まりです。

さあ、子どもの時間が始まります。

（大和郷幼稚園）